



## — 随 想 — 海外の国・都市を旅して

株式会社リエゾン・デートル

代表取締役 酒井 由紀子

私は父親の仕事の関係でアメリカのニューヨーク州で誕生し生後2か月で日本へ帰国しました。その後ニューヨークを再訪することは無く、いつか世界各地を訪れて見聞を深めた後に訪れてみたいと思っています。

現在、私は企業の海外展開サポートの仕事をしており毎月1週間程度は日本以外の国で過ごしています。この仕事に就いたきっかけは高校生の時に香港に1年8か月滞在したことにさかのぼります。米国で生まれたにも関わらず英語が得意ではなかった私は、父の香港転勤を機会に英語の勉強を目的として同行し現地の高校へ通いました。英語力が乏しかった私はイギリス系、アメリカ系の学校へは入学できず、アジア人が英語を学ぶ高校へ受け入れてもらいました。その学校はまさに「人種のるつぼ」でした。香港（当時はイギリス領）、韓国、フィリピン、インドネシア、ミャンマー（当時はビルマ）、タイ、インド、パキスタン、オーストラリア、ニュージーランドなどアジア・オセアニア地域から集まった子供たちが共に学びました。英会話が出来なかった私は学校に通い始めて数か月はコミュニケーションを取ることが出来ず級友が話しかけても満足に応える事も出来ませんでした。そんな私に級友は辛抱強く話しかけたり筆談をしたりしながら宿題等を教えて助けてくれました。友人のサポートで何とかコミュニケーションを取る程度に英語を学び帰国した時には香港で受けた恩を自分なりの形でお返ししたい、アジアと日本を繋ぐ仕事をしたいという思いが芽生えていました。その後大学へ進学、卒業し、いくつかの会社で海外事業に携わらせて頂いた後に2011年に起業をして現在はアジア地区を中心に海外へ展開する企業のビジネスサポートをさせて頂いています。

仕事とプライベートを併せて過去訪問したのは17か国、39都市。仕事が縁で知り合った友人を再訪する事も少なくありません。ここからは特に私と縁があり記憶に残った街の話をして頂きます。

まず初めには思春期の私に深い印象を与えた香港について。香港に住んでいて実感したことは自分がアジア人であるというアイデンティティでした。学校はもとより街には様々な国の人がおりその多くはアジア人。高校生になるまで外国の人々に触れる機会が多く無かった私には多様な人種が自然に共生している事が驚

きでした。私の高校時代は1980年代でイギリス領であった事もあり街は西洋と東洋が混在していました。ヨットハーバーやホテルなどの西洋建築、東南アジアで見かけられるコロニアル風な建物が香港島の中心地にある一方、九龍半島には九龍城という中国系のマフィアの巣窟かと言われたスラム街がありその辺りには近寄ってはいけないと両親に言われたりしていました。九龍半島と香港島を結ぶスターフェリーの乗組員は当時イギリスの水兵さんの制服を着ておりさわやかな雰囲気です。市場に行くと新鮮な野菜や日本では見たことのない果物が豊富にあり屋外の冷蔵設備もない場所で売っている事が印象的でした。香港島のビクトリアピークの中腹にあるアパートに住んでいたことから毎日学校へ通うために坂道を歩いて降り、その道からは香港島と九龍半島の間にあるビクトリアハーバーという入り江が見えて乱立する高層ビルの間にはジャンク船という中国風の帆掛け船が見え隠れしていました。香港に住んでいて強く感じたことは歴史や政治の影響と人間の強さです。戦争の結果領地とされた場所であった事による東洋と西洋の建築物の混在。とは言えその環境をしたたかに活用してアジアの金融中心として発展し、世界各国の人々がチャンスを求めて訪れる街として成長したというねばり強さ。そして何よりそのような変わりゆく環境変化の中で人々がとても元気がよく、私にとっては世界観や人生観の大転換が起きた場所でした。



次に印象深い場所はヨーロッパです。大学の卒業旅行で初めて訪れたのがスイス、フランス、イタリアでした。まず、それぞれの国の独特な雰囲気に圧倒されました。その主な理由は古くから残された建物と街並みです。地面は繋がっているのに国境を越えると大きく趣の異なる建物が連なり、高層ビルは特定の場所以外殆ど見かけず、近代的な建物は周囲の環境となじむように配慮されており、何百年という歴史を経た建物が現代の人々が共存している様子は驚きでした。あた

かもタイムスリップしたような、歴史的な場所に実際自分がいる不思議さを感じた記憶があります。東京においては寺社仏閣以外で古い建物に触れる機会が少ないため、数百年かけて建てられ、数百年住み続けられている建物たちの傍にただで過去の歴史に思いが馳せられました。木造建築が主であった日本とは異なる石造りの建築が主体であったヨーロッパならではの経験でした。私は個人的に歴史を感じられる場所が好きなのでと実感した訪問でした。



次に仕事を始めてから頻繁に訪れているア

ジア諸国。何度も仕事でリピートしているため既に訪問回数は100回を越えています。冒頭でお話ししました通りアジアと日本の架け橋になるべく現在も活動中なのですが、特に最近多く訪問しているのがベトナムです。アジアはインフラが整備されていないとよく言われますが私はあまり気になりません。雨が降ると川が溢れ、道が洪水のようになり交通渋滞が起こる。ベトナムでは大量のオートバイが所狭しと走り歩道であろうと走れる場所はどこでも走る。家族5人が一台のバイクに乗っている事も当たりまえ。そんな環境にいると自然と寄り添って暮らす人間の強さを感じます。それぞれの国は戦争中に統治されていた国の影響がそこかしこに見られます。ベトナムはフランス領であった時代の建物が多く残されており洋服や雑貨、食べ物にもアジアとヨーロッパのテイストが混在しています。バケットにパテとなますとパクチーが入っていて西洋と東洋が口の中で主張し合ったりもします。地震の少ない地域なので高層建築以外の新しい建物はレンガを積み上げて作ります。少ない材料で沢山作る秘訣なのでしょうか。レンガの断面は穴が開いています。そして建物を立て直すときには石鎚で壁を叩いて壊します。建物に対する安全安心な感覚がその様子を見た時に一瞬にして崩れ落ちた気がしました。とは言え、フランス統治下時代に建てられた建物は頑丈で、天井が高く広々としておりヨーロッパのように当時の古い建物を残し内装のみを改装したカフェやショップもあります。その中にいると自分がどこにいるのかふと分からなくなったりします。

今まで訪問した場所で私が再訪したいなと思う場所はその国らしい特徴があり、どこかその国の歴史や文化を感じられる場所です。時代に合わせて変化をしてはいても古き良き時代の建物を保存して文化としてき

ちんと管理しているところ。外からの訪問者である私もその良さを実感できるところです。

最後に海外を頻繁に訪問して思う事は、他国の良さを味わうとともに自分の住む国と街を大切にしたいという思いです。私の住む東京都中野区はカルチャーとサブカルチャーが混在した面白い街です。井上円了が作った哲学的な問いがちりばめられた哲学堂公園や、その近くには「近代上水道の父」中島鋭治博士が設計した水道タンクがそびえ立ちその周囲の桜並木はこの世のものとは思えないほど美しい。中野駅近くにはマンガやサブカルチャーのショップが多数あるかと思うと伝統芸能も豊富で能楽堂もある。今後はそんな中野を私の関わってきた海外へ発信をしていきたいと考えています。現在、具体的に地域の方々と計画をしているのがインバウンド観光客の子供向けのサマースクールです。夏休みの時期に海外から訪れる観光客は昨今、家族連れで長期滞在をする傾向が増えてきました。大人と子供では興味の対象が異なります。旅行中にはなかなか別行動をすることが出来ず、お互いに妥協をしながら付き合っている時間も多いと聞きます。そこで考えたのが海外から来られた子供たちをお預かりして地元の様々な文化に触れて体験してもらおうという企画です。中野区には国際系の学部や観光学科のある大学が数校あります。大学生に企画やボランティアスタッフとして参加をして頂き、地域の観光協会や国際交流団体、イベントコンテンツを持つ組織やセキュリティ会社と共同して運営をしていきたいと考えております。また地元の日本人の子供達にもサマースクールに参加してもらい国際交流の場としても活用して頂きたいと思えます。中野区は現在グローバル都市として25年後、50年後を見据えて発展を目指しており、サマースクールにより海外の子供たちに日本らしく中野らしい体験をして頂く事から、将来大人になった時に地元中野を目指して再訪をして頂けることが出来たらと願い実現に向けて構想を練っております。

#### ●酒井由紀子(さかい ゆきこ)プロフィール●

株式会社リエゾン・デートル代表取締役  
1965年米国・ニューヨーク州生まれ。大学卒業後、日系・外資系企業で海外事業23年の経験を有する。2011年に起業し、2015年に法人化。現在は中小企業の海外展開支援とグローバル人材育成の教材制作・出前授業を主たる事業として提供中。  
NPO法人 国際人をめざす会 理事  
第1回 中野区ライフサポートビジネスコンテスト優秀賞受賞  
第5回 キャリア教育アワード中小企業第二部(協働の部) 奨励賞受賞